

|               |   |
|---------------|---|
| Title         | イスパニアの教育者たち   |
| Author(s)     | 吉田, 秀太郎   |
| Citation      | 大阪外国語大学学報. 7 p.91-p.120   |
| Issue Date    | 1959-04-01  |
| oaire:version | VoR   |
| URL           | <a href="https://hdl.handle.net/11094/80153">https://hdl.handle.net/11094/80153</a> |
| rights        |   |
| Note          |   |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# イスパニアの教育者たち

吉 田 秀 太 郎

## La educación en España a través de la historia

*En memoria del maestro M. B. Cossío (1858—1935)*

Hidetaro YOSHIDA

### SUMARIO

En tierras de Castilla, yermas a primera vista, brotan plantas de múltiple variedad y difícil clasificación, similar fenómeno acontece con las ideas, de captación difícil por su diversidad y número. Y no son excepciones las que atañen a problemas pedagógicos, antes bien por sutiles son más arduas de recoger. Los educadores hispanos han mantenido prolongada y animosa lucha contra factores adversos ideológicos, religiosos y políticos en el camino de educar a los jóvenes ciudadanos y superar el nivel intelectual del pueblo. Señalar algunas cumbres severas de esta lucha es el modesto propósito de este ensayo, cuya dificultad mayor, aparte la deficiencia de mi capacidad, radica en que la obra docente, la estela del maestro no es siempre obra escrita, sino libro vivo del alumno formado por la mano sabia, que suele ser en España más eficaz y valiosa que su obra impresa e investigable a distancia de siglos.

---

### 序

イスパニアに於ける教育思想及び制度は極めて多岐である。これは、この国の有する人種的、歴史及び心理的特異性に基くものであって、或るイギリスの自然主義者も述べている如く、丁度、あの大部分は荒廃した、不毛のマドリードにさえ、イギリス全土に於けるよりも更に多くの植物が生えている様に、イスパニアには、非常に多くの思想が、体系もなく、ひしめいているのである。そもそもイスパニヤ人の性格は、勿論個人差のある事は認めるが、各地方によって、顕著な特徴を持っており、これがこの国の性格に、大きな影響を及ぼしている。中央部から北部にかけては、即ちバスク、アラゴン、ナバラ地方の人は、総じて頑固な、自信の強い、物事に動じない性格をもっている。いわゆる人はよいのだが、何処か荒削りで、強情なところがある。北西部のガリシア地方では、先述の自信が、最早、他人を信じないまでに、こうじて来ている。そして、一

見謙遜と思われる態度も、実は丁度蛇が穴の中で居る様に、自己防衛の一手段である事が多い。南部アンダルシア地方の住民は、全く自由奔放で、如何にも明朗な性格の持ち主である。更に東北部では一般に实际的な人物で、官能的であり、模倣が得意で、創造力に乏しい地中海人が少なく、お互に、同僚をうらやむ事もなければ、又、その優越性を恐れもせず、むしろ他人の長所、秀れた点の上にあぐらをかいて、空威張りしている。彼等は、一寸矛盾している様だが勤儉を重んじ、而も社交性に富み、他の地方に住む同国人よりも、むしろ中部ヨーロッパ人的性格を有している。又、南東部には、生来、芸術的天分に恵まれた、セム族の子孫が多い。イスパニア中部、レオン及びカスティリヤの住民は、夫々お互に他の地方の人々の性格上の長所、短所を併持している格好である。アラゴン人の堅固さと、ガリシア人のひかえ目な態度をもっているかと思えば、アンダルシア人よりは想像力に乏しく、又地中海地方の人々より虚飾少なく、又官能性にも劣っている。上記は大体に於けるイスパニア人の地域別による性格の分類であるが、こうした、イスパニア国内に於ける性格の多岐性と富かさは、願ってもかなわない一つの宝とも云えるが、他方、これが、この国の教育制度、或いは政治組織の上に非常なむづかしさをもたらしている事も否定出来ない。イスパニアの教育について論ずるとき、こうした根本的要素を度外視してはすべては無意味であろう。本稿に於ては、イスパニアが、今日に至るまで、如何にその精神の指針とも云うべき教育に関心を寄せていたか、又、各時代に於ける教育者が、如何に、諸々の政治的、宗教的、その他経済的、思想的圧力乃至は問題と取組みつゝ、その理想を実現し、或いは実現への努力を惜しまなかったかを、時代を追って観察し、今日のイスパニアの理解を一層深め、それが直面している問題の解明の一助としたいのが目的である。

### 先 駆 者 (ロ ー マ 時 代)

イスパニア精神の指導者は、これを遠くローマ時代の昔に求めることが出来る。

Seneca (A. D. 3~65) は南部イスパニアのアンダルシアに生れた哲学者で、暴君 Nero の個人教師でもあり、悲劇の生涯を閉じた人物だが、彼は、教育に関しては、特に道德教育に力を注いだ。彼の主張によれば、善悪の判断を行わしめるものは意志の力である。そして、その善に人を引きつけるのが教育の本質である。つまり、教育の至上目的は、自己統御にある。そのためには健全な、充分に鍛練された身体、悪徳に打ち克つ身体が必要だと説いている。従って教育者の仕事は、子供の健全なる力を育成し、不健全な、有害な力を抑圧することである。道德教育は、義務を教えるのではなく、真面目な、正直な人生を生きるための意志の鍛練である。従って、いたずらに多言を弄するよりも、自から以て卒先垂範する方が、その教育上の効果たるや、顕著なるものがある。知識を教え込む教育は、子供の好奇心の中に求められなければならない。口答に

よる教授法は興味があり、子供を刺戟するが、主な知識の源は、飽くまで読書でなければならぬ。学問は一生涯の仕事であり、(tandiu discendum est quandiu vivas)、又、知識や道徳は人生に役立てるためのものであること(non scholae, sed vitae discimus)、今日為し得ることは、明日に延ばすべからざること、時間の浪費をいましめたことなど、イスパニアの教育は、こうした卓見を有した偉大な先駆者を有している。問題は、これを後世、如何に発展させていったかであり、後にもわかる通り、輝かしいリーダーを持った此の国の教育が、やがて思いもかけぬ大困難にしばしば遭遇するのは、皮肉なことである。兎もあれ、西暦一世紀の昔、すでにこうした教育学説が、イスパニア人によって打ち立てられたことは注目すべきことであろう。

Quintiliano (A. D. 35—95) も亦イスパニヤはエブロの谿谷の出身者で、彼の生涯の殆んどを、ローマにて、教育に捧げた人物である。彼の修辞学は余りにも有名である。彼は、子供の知的早熟を、空虚な、有害なものだとして軽蔑した。学問の主たる源となるのは、他でもない好奇心であると考えたのも彼であつた。又、子供の間に競争意識を盛り上げることが有力な刺戟となること、罰則が教育効果上疑わしいものであること(と云うのは罰則を受けた子供は常に劣等感を抱き、結果これは、子供の魂を硬化させてしまうから)、遊び時間が、教室内の勉強の時間よりも、子供の性格の観察には役立つところが多いことを説いた。彼は、幾何学の学習目的として、具体的なものから、抽象的なものへ移行する途上にある子供等の知性の訓練を挙げており、音楽は情熱を喚起し、身体の運動に調和をもたらすものだとしている。

口答教育に於ける彼は、常に厳格ではあるが怒らず、粗野なところがなく、柔和で、博学、素朴で、魅力的であつた。彼の自然に対する敬虔な態度と、観察や経験への信頼は、我々に、彼の教育方法の秘訣が何であつたかを明らかにしている。生来楽道家で、子供等の中、真に無能者は極めて限られた数の者だけだと見ている、が同時に、教育には子供の素質の重要性を認め、教育の影響の限界を覚っている。この他、ローマ時代の教育家として詩人 Martial (A. D. 43—104) の名をも挙ぐべきであろう。

## ムーア人時代の文化と教育

歴史にも明らかな如く、八世紀のはじめ、アフリカ大陸からイスパニアへ、アラブ人、シリア人、バーバリ人が流れ込み、そこに先住していたイベリア人、ケルト人、ローマ人、スエゴ人、西ゴート族等との戦いの結果、優位を保って、彼等と融合した。彼等は、軍事的には、その手法が、ローマ人によるものとは相似ず、この国の北方を未征服のまま、彼等先住民と和合したため、言語の上では大した影響もなかったが(ラテン語に比して)、その生活全般については、極めて重要な役割を果たしている。偕、この国への侵入者、或いは商人共は、驚くほど文化の吸収、伝播に

適しており、イスパニアと、古い文明（エジプト、ペルシャ、インド、ギリシャ）との交流に大きな力となった。

彼等は回教をイスパニアにもたらしたが、しかしキリスト教と戦おうとなどせず、むしろ、彼等はキリスト教徒との融合をはかった。こゝにイスパニアの運命が大きく左右されることになった訳である。農業に豊かな経験を有するシリアの農夫が、大勢イベリア半島に渡来した結果、イスパニアでは、農業も盛んになると言った具合だった。偕、文化的には、当時のイスパニア人は、常にカイロ、アンテオケ、バクダッド、イエルサレム、メッカ、ダマスカスなど、東方の文化の中心地と接触を保たねばならなかった。イスパニアに於ける回教徒や、ユダヤ教徒らはエジプト、アラビア、パレスチナ、ペルシャ、シリアに赴き、イスパニアの各王国へは、東方の哲学者や科学者が訪れた。彼等は当時、すでに西欧のルネサンスに気づいていた。事実、これはコズモポリタンなユダヤ人、ビザンチンキリスト教徒、敬虔なキリスト単性論者、冥想的なネストリウス教徒、二神教のペルシャ人、仏教徒のインド人、保守的なエジプト人など、東洋人の貢献による本当の古典文化のルネサンスだった。アラビア語で書かれた図書は沢山イスパニアに入ってきた。或る者は、個人で40万冊も持っていたそうである。

キリスト教、回教、ユダヤ教の三つの宗教が同国内に均しく存在したことは、思想的寛容の兆であったし、又、コルトバのカリフの解体後、イスパニアの国内が、多くの独立した小王国に分かれたことが、思想の自由に対するこの上もない保護となった。

この当時の国家の全般的教育組織乃至は制度は實際存在しなかった。しかし、牧師、慈善家、或いは教育に熱心な皇子などは、これまでよりも一層教育の普及に（特に読み書きの）力を入れていた。只、こゝで用いられていた教科書はコーランであった。これは一方では宗教教育を施し、他方では最も純粋な言葉を教えようとする魂胆からであった。尤も合理主義哲学者 Abu Bekr ben Alarabi (1076~1148) は、これに対し、子供等には先づ言語と詩を、そして次に算数を、で最後に、理解力が充分発達したときにコーランを読ませようとした。読み書きは同時に教えられた。そして言葉（文字や音節ではなく）が最初の単位として用いられた。

初期の段階に於いては、学校教育は、予言者の言葉に含まれている宗教的真実を普及すると云う見地から、高尚な職務であった。従って教師も身分の高い人士になっていたが、後、聖書が、政治的目的で学ばれる様になるや、彼等は一般社会からも採用されることになり、俗化した。回教寺院内では、数時間の祈禱の後、講義が行われるのが常だった。高等教育も可成り発達していた。講義の内容は文法、文学、法律、医学、数学、天文学、哲学だった。コルドバのカリフ時代に於ける学問の発達ぶりは、なかなか盛んで、この町が、バーバリ人によって崩される前の1012年に死んだ Ibn Faradi は、今も尚保存されているが、当時のアンダルシアの学者の歴史を書い

ている。しかし、イスパニア人の民族的性格から、思想の伝達は、東洋に於ける国々の様にはゆかなかった。

トレドは、イタリアのパレルモに於けるよりも更に大規模な、東洋とキリスト教世界との接触点だった。当時回教寺院は素晴らしい図書館を有していた。Raimundo 大僧正は翻訳学校を開設したが、ひとりムーア人だけにとどまらず、ユダヤ人、イスパニア人、イタリア人、スコットランド人、ドイツ人などが、自然科学、医学、数学、天文学、哲学に関する書籍をラテン語に訳すのに大童だった。尤も、こうした翻訳グループは、カタルーニアのリボリに、スケールは小さいが存在していた。事科学に関しては、アラビア語は全ヨーロッパの言語となっていた。

### Alfonso 賢王の教育政策

こうした、回教徒による文化の向上と教育の振興の傍ら、イスパニアの、本来のキリスト教文化を盛り上げてゆこうとする気運も少なくはなかった。イスパニアが、全く独自の立場で、国の建設に乗り出すに至った大きな原動力は、何と云っても、キリスト教王国カスティーリヤの Alfonso 十世の学問、教育の振興と云う大事業であろう。カスティーリヤ語が、イスパニア語の代名詞として用いられていることから、この王国が如何に、政治的に、文化的に、イスパニアの背骨となっているかを伺うことが出来よう。

先にも述べた如く、Alfonso 十世は、教育に力を注いだ人だった。彼の編纂せしめた *Estoria General* は、聖書や、ローマの作家、十二世紀頃の作家を基にした、広汎な人間の生活及び文化の歴史であるが、その約三分の一が、1280年頃に完成されたのみで、その他は未完成のまゝである。その第七巻は学問に関するもので、trivium, quadrivium の二系列の学問を奨励している。前者は文法、論理学、修辞学で、後者は算数、幾何、天文学、音楽となっている。この何れの系列を子供に先に教えるべきかについては、ちゅうちょした様子である。先づ文法、論理学、修辞学を学ばせると云う見地は、知識の獲得に言葉は欠くことの出来ないものだからと云うもので、他方、算数、幾何、天文学、音楽を先づ教えようとする見方は、前述の三学科が、我々に判断力をつけるだけにしか役立たないのに反し、後者が、事物の自然の姿を見せてくれ、我々を賢明にするからと云うのであった。

イベリア半島に於ては、八、九、十世紀は軍事的闘争の時代であったが、十一世紀、十二世紀頃になって、新しい東西文化の交流がようやく繁くなって来ていた。これに対し、十三世紀は、所謂クラシックと科学との、最初のかつ闘のはじまった時代であることがわかる。Alfonso 十世は、この他、ムーア人、キリスト教徒、ユダヤ人などの天文学者の知識を総動員して、これを集大成したり、法典の編纂で以て、西洋のルネサンスに貢献するところが少なくなかった。その Las

Siete Partidas と称せられる法典の中には、ローマ法が大いに生かされている。そして、これは、強制する法律と云うよりは、むしろ法知識のモデルとも云うべきものであった。而もこれがカステリア語で書かれたところに、この王国の言葉が、他の地方の方言に優越する事になった理由の一つがあり、又、国家の統一に大きな力となったのである。この法典が、はじめて、教養のある、限られた少数の人を一般大衆とに、知的連繫をもたらし、後者に、高い文化への門戸を開放したことになる。この法典のもつ意義の深さは、それが、更に教育に関する規定を含んでいる事である。しかし、こゝではまだ、全公民を同じ程度に教化しようとするに至ってはならず、その目的とするところは、学問、知識の保存と、支配階級者の教育であった。従って文化は、ギリシャに於ける如く、又、ムーアの統治下に於ける如く、貴族的な色彩を有していた。Partidas は、高位僧侶には文法、論理学、修辞学、音楽、宗教及び国家情勢などの知識を習得する様すゝめ、その他の学問は、彼等に敬虔な態度を失わせる恐れがあるため都合が悪いとされた。

Partidas では人格の形成に注意が払われ、作法には特に重点がおかれた。その一例を示せば、貴族の家庭教師は、この作法を是非教えねばならなかった。清潔さ、堂々たる態度、軽快で、中庸を得た威厳のある動作、柔和にして、言葉の速度速からず、遅からず、大きなジェスチャーなく、常に上等の衣服をまとい、容貌よく、又、飲食にも節度のある事などが要求された。テーブル・マナーも亦極めて重要なものだった。あわてゝ食べたり、口一ぱいに食物を入れて食べたり、食事中、歌ったり、ペチャクチャ囁いたり、又、皿にもたれかゝる様な姿勢をとったりする事は禁止されていた。今では当然の事だが、食事の前には手を洗い、タオルで拭わねばならなかった。皇太子には真実への愛、神への愛、家族、臣下への愛が教えられ、のゝしり、呪いを避けしめ、適度に楽しく、決して陰気であつてはいけなかった。又、自己の持ち得ないもの乃至は持つべきではないものを欲しがらぬ事が教えられた。純粹に教えるものとしては、読書、乗馬、狩猟、武芸、遊戯の域を出なかった。

この Partidas は、フランスのフィリップ三世の皇子を教育する目的で、Egidio Colonna が約三十年後に書いた *De regimine principum* と、両方とも教育に関する中世キリスト教理を代表している点で、お互に共通している。キリスト教国イスパニアに於ける学問は、もはや、僧限に限られることなく、やがて創設された大学で、独立して研究が行われる様になった。この学校の創設は、教会のイニシアチブではなく、国王のそれによるものであった様である。Palencia 大学は約1212年、Salamanca 大学は1215年、Valladolid 大学は1260年に夫々創立された。かくて、国王による学問のコントロールは、ムーア的思想から離れ、ビザンチン的なものに復帰した事を意味している。又、学問に普遍性を与える意味で、世界の各地から、大学へ専門の教師を招へいした。倂、Partidas によれば、大学とは、学問を目的とする教師と学生との結合であ

ると定義され、法皇、皇帝或いは王の命令を必要とし、その教科内容は文法、論理学、修辞学、算数、幾何、天文学、法律学であった。大学の理想的な場所として薦められているのは、都市から程遠からぬ郊外で、空気がよく、美しい環境で、パン、ブドー酒、宿屋、本屋の多いところである。各学科には担任の教官を配置し、給料は国王により決定されること。学長は教師及び学生により選出される仕組みになっていた。学内で最も名誉ある存在であり、而も特権を享受していたのは法津学の教師であった。と云うのは、彼等は正義を司る人間だからである。学位試験は、すべて口答で行われた。かくて Alfonso 十世はイスパニアの教育制度に、はじめて新しい指針を与えたのであった。

カタルーニャ生れの思想家で詩人でもあった Ramón Lull (1235~1315) も、その後、イスパニアの教育に少なからぬ貢献をした。彼は、Mallorca に Colegio de Miramar と云う学校を創設した(1276年)。又彼は作品 Blanquerna の中で、プラトーン、トーマス、モア、カンパネルラ風の理想境を描き、十四世紀になっては、一時教会から彼の説が非難されたこともあった。

## 学 問 の 復 活

十五世紀になって、イタリアの影響は大きかった。イスパニアへは、ギリシャ、ローマの古典、ダンテ、ペトルルカ、ボッカチオの作品が次々と紹介された。これまで中世イスパニア思想を支配していたスコラ学派は、こゝにようやく競争相手を得ることになった訳である。学問も、道徳も、すべて新しい危機に直面した感があった。イスパニアの貴族たちは、忽ちにして、新しい学問に興味を寄せた。恐らくは、素晴らしい図書のコレクションが、彼等を魅了したのであろう。アラゴン国王 Fernando とカスティリアの女王 Isabel との結婚、更に、これまで長期にわたりイスパニアに君臨していたムーア人共を Granada から追放し、遂に1492年、イスパニアの統一を得たことが、非常に大きく、キリスト教文化及び学問の向上に役立った。尤も、この急激な国外追放政策により、にれまでの勤勉な、又豊かな経験を生活の各分野に有していたモーロ人たちが居なくなった事が、以後のイスパニアの進歩に大きなブレーキとなったと見る者も決して少なくはない。然し兎も角、一つの統一された国家の成立は、それ自身、大きな意義を有している事は明らかである。先述の諸王はイタリアから学者を招き、一般義務教育制度を設け、子弟を学校にやらない父兄は、これを罰する程であったから、学問に対する大衆の関心も高まって来た。尤もこれは徹底して行われた訳ではなく、たゞこれが、中世的な物の考え方から脱皮し初めた初期の段階と云う点で注目に値する。Isabel 女王自身、ラテン語を学び、又、宮廷内には Schola Palatina を設けた。Cardinal Jiménez de Cisneros は Alcalá 大学を創立させ、古い、Salamanca 大学の中世的、保守的学問に対抗してルネサンスの精神を具体化して功があった。同様



な傾向を持つ学校が Sevilla, Granada, Toledo, Sigüenza その書の町に創立された。Alcalá の Colegio Trilingue (1508年) では、ヘブライ語、ラテン語、ギリシャ語が教えられた。Polyglot 聖書の翻訳は1514年、Cisnero の手になり、同時に Erasmus は彼の新訳聖書を完成した。Antonio Nebrija は、1492年、カスティリア語文法、辞書、綴字に関する著書を公けにして、成長期にあったイスパニア語に（他の方言をしりぞけて）一つの科学的、近代的基礎づけを行った。イスパニア語の確立が、此の国の教育、文化の発展に及ぼした力は、極めて大きいと云わなければならない、この点に於て、Nebrija の仕事は、高く評価されねばならない。ルネサンスと共に、イタリー、フランスの影響で、秀れた文学作品が現れる様になり（主として抒情的なものだったが）、古来のイスパニアの伝統と相対することになったが、両者互に優勢を競う中に、結局は、小説、劇作品などに於いてレアリズムの勝利、つまり伝統の勝利となった。

哲学の分野でも、これまでのスコラ学派の思想と、新しく入って来たギリシャ、ラテンの思想の奔流とが融合して、内容が豊かになった。それでも依然前者はこの国では根強かった。ギリシャ、キリスト教的思想はムーア、イスパニアの漆喰で固められていた形であった。スコラ哲学も、先述の如く依然力を有しており、Salamanca 大学の教授であり、ドミニコ派の僧侶でもあった Francisco de Victoria (1486—1546) をはじめ Domingo de Soto, Melchor Cano, Francisco Suárez 等はその代表的人物だった。その他、ネオ・プラトン派的、汎神論的、神秘主義的教義も消え失せなかった。ポルトガル生れのユダヤ人 León Hebreo は、イスパニア国王 Fernando の主計官であったが、後、ナポリに住み、Dialogo di Amore (愛に関する対話) を書いたが、教会からの圧力で発礼となった。この本は、ルネサンス時代の人々の思想を代表するものとして興味深い、イスパニアでも、当時の文学に顕著な影響を及ぼしている。彼は Saadya, Gabirol などと同様ユダヤ的思想傾向をもち、愛情を人生の本質だと考えていた。彼の神秘主義的考えは、イスパニア詩人 Fray Luis de León (1527—1591) にも多大の影響を与えたが、それは Santa Teresa (1515—1582)、及び San Juan de la Cruz (1542—1591) に至って、神秘主義の最高に到達したのである。Micael Servetus (1511—1553) は独立した思想家で博学であったが、神秘的汎神論に傾いていた。同様な傾向はフィリップ二世の皇子の個人教師 S. Fox Morcillo にも伺われる。その他の思想家は大体に於てアリストテレスの学説を継承していた。ベネディクト派の僧侶 F. Ruiz de Valladolid, Juan Giner de Sepúlveda, G. Cardillo de Villapando などが、その代表的人物であった。中には Alonso de Herrera の如く、アリストテレスの説に反対する者も居た。先きに新訳聖書の翻訳で一寸ふれた Erasmus のイスパニアに於ける影響は相当顕著なものであった。つまり、スコラ哲学から、大自然の直接的研究への復帰、具体的には、隠遁生活から、体操による身体の鍛練への移行、修道院の生活への嫌悪

ルネサンスとカトリック教との和解への努力などがそれである。Alfonso de Valdés (1490—1532) は Carlos 一世の秘書をつとめていたが、Erasmus にインスピレーションを求め、皇帝を擁護して、教会の腐敗、墜落を攻撃したが、当時既にあった宗教裁判にかゝり、迫害された。宗教改革に魅せられて、危く迫害をのがれ、海外に亡命をした人も少なくない。Juan Pérez はジュネーブから更にフランスへ、P. Núñez de Vela はローザンヌへ、C. de Valera はオックスフォードへと云う具合に。

偁、当時の各大学は、大体に於てヨーロッパで最も普及していた形式及び組織を採用していた。スコラ哲学は、それらに知的力添えを行っていた形だった。教科内容としては、七つの教養科目と、ローマ法、慣習法が教えられた。これには後、自然科学及び医学が追加された。組織としては、元則的に自治制度だが、国王が、視学を派遣し、かくて公力による一種のコントロールが行われていた。授業は専ら講義によるものであった。偁、大学はその規模が大きくなるに従って、これまで存在していた教師と学生間の親密さが次第に消え失せ、両者は、遂には古代ギリシャに於けるが如き、真理の探究に向って共に進むべき結合体ではなくなった。彼等の役割は変ってゆき、一方は知識をストックしている者であり、それを学生達に分与する立場で、而も教わる者に、習得した知識のテストを行う立場にあり、他方学生は、既成知識の受け取りと保持に時間を費し、それを出来るだけ上手に見せかける様努めねばならぬ立場であった。又、教授は契約制度で、年数を限って、競争試験により採用された。その選択権は、既存の教授博士連と学生にあった。一度学校に採用された教授も、年限が来ると再び採用試験を受けるか、或いは解約される仕組みになっていた。この時代には、教会のための教育、つまり宗教教育は大学の講義中には無かった。と云うのは、そのためには、特殊な教育を施す神学校が設立されたからで、そこで宗教は学べばよい事になっていたからである。町々にはグラマースクールが出来たが、後、大学にまで昇格するものもあった。二、三の宗教団体（と云ってもキリスト教のであるが）、特にエスイタ派が私設学校を作ったことも、注意すべき出来事である。そこではギリシャ、ラテンの古典を教えたが、こゝを出た者には Ribadeneira, Mariana, Gracián の様な著名な人物がいる。女子の教育はどうかと云えば、Toledo, Salamanca, Guadalajara その他の町に高等学校が出来るまでは、専ら尼寺で教育を受けていた。大学の自治は既に述べた通り、最初から認められていたが、それでも国家権力が（特に国王が）これをコントロールしていたのは、或る見方では、これが大学の自由と権威とを保護することになると見たからである。かくて、国王 Fernando と Isabel 女王は、教授の選挙に賄賂のなき様配慮し、固くこれを禁じ、又、学位の授与にも規則を設けた。国王は更に十五世紀の末期から十六世紀の初期にかけて、医者及び薬剤師には特に職業適性検査の制度を設け、これらの職域に権威を与えた。大学での一般の精神的関心は神学的倫理的なもの

へ傾いていた。が他方、新しい学問に於ける科学的進歩及び応用にも、注目さるべきものがあった。当時発展の途上にあったイスパニア帝国の勢いが、それに拍車をかけた。新たに博物館、植物園、図書館、古文書保存所などが設けられた。印刷技術が輸入された後も（最初の印刷所は1471年、Valencia に出来ていた）、外国図書は、国家の関税引下げ政策により、国内に流れ込んだ。がこれもつかの間、やがて出版の自由は抑圧され、図書の検閲がはじまった。1502年にはその権限が法廷或いは僧正にゆだねられた。この圧迫が宗教的理由による事は明らかである。一度なされた宗教改革に対する反宗教改革の動きが、イスパニアでは力を得ていた時代である。Felipe 二世は異教的精神の勃興を恐れて、専らカトリック教を保護したため、さきに回教徒らを国外追放したが、更に学問の面でも、学生を海外に留学せしめない規則を設け（1559年）、これに違反する者には罰則を加えた。これは或る見地からは、国内の大学の退廃をおそれ、優秀な学生は国内にとどめようとした政策であったとも云われている。

#### Luis Vives (1492~1540)

Egidio Colonna の *De regimine principum* がイスパニア語に翻訳され、出版されたのは1490年のことであった。これは、イスパニアに於ける最初教育関係図書で、いわば、十三世紀のルネサンスの贈り物であった。当時、教育が一つの学問として取扱われていた国は、イスパニアでもなければ他のどの国でもなかった。それ故にこそ、1492年、Valencia に生れた人文主義者 Luis Vives の功績は大きく評価さるべきである。彼は1509年、祖国を leaving、生涯の殆んどをベルギー、フランス、イギリスで過した人である。彼の教育界になした貢献の主要なものは、先づ、彼の時代の教育の実情を鋭く批判し、これまでに誰もが行ってなかった。教育の理想と規則を彼なりに建設的に編み出したことであり、更に、女子の教育に開拓者の眼を開いたことである。彼は、修辞学や論理学などだけで事足りるとするスコラ学派の教育態度は、若し自然や、新しい事象の観察によりて養われるのであれば学問の後退を意味すると決めつけた。只単なる頭脳の訓練は、目的を持たず、その効果がないと主張する。かくて彼は、教育を人類の全体的幸福を増進せしめる事を目的とする、肉体的、知的、道德的訓練であると考えたのである。外界の現実についての知識を得、これを我々の実生活に役立てる事が大切だ、天啓、遵奉、自制に対するに、知識、活動、有益性を以てすべきである。教育に関して、彼がかゝる体系を作ったのは、先づ Erasmus の、新しい、解放の念に燃えた姿に大いにひかれたこと（彼とは親交があって、かねがね彼を尊敬していた）、彼の足繁く訪ねた Sir Thomas More の家庭の雰囲気、彼が教鞭をとっていた Oxford 大学の思い出、彼が大部分の人生を過したベルギーの町の明かさなどに強く影響されている。

難解な形而上学や、空虚な論理を差し置いて、彼の興味は、実用的、教育心理学に向っていた。つまり、心の活動、思想連想のメカニズムと、子供の傾向の観察に重点を置いている。具体的な彼の教育計画は、第一に言語の習得、特に母国語の学習に重点を置くこと（これは彼がはじめて考え出したものである）、そしてその後、宗教や文化に対する共通した言語としてのラテン語を学ばしめることで、それも直接口答方式で、記憶と模倣に訴え、言語の習得に必要な以外の文法は教えない。第二の、その他の学科の学習、即ち観察と経験を通じての自然科学（子供の理論的なもの、抽象的な知識よりも、具体的なものを好むと云う傾向を生かして）、地理と組み合わせた歴史、但し軍事上の手柄話などは除外する（彼は平和主義者だった）、实际应用のための、或いは曖昧な、不正確な心を正すための数学、研究、学習の助けとしてのみの論理学でなければならない。第三に、すべての人間的権威からの開放で、それに代るものとして、経験に重点をおく、帰納的方法を用いて、その除々な進歩の過程を再生させるための科学教育、第四は女子の教育、但しこの目的は、女性をして、従順で、ひかえ目な人間に仕上げることにあった。最後に、Academia と称される新しいタイプの学校を創設し、七才から廿五才までの子供及び青年を、一つの指導体の下に教育し、初等、中等、高等教育を一貫して行うこと。

Vives は、一般大衆が何を望み、何に苦しんでいるか、彼等の当面の問題は何であるかを理解していた。当時の社会は、貧富の差甚だしく、想像に絶するものがあつた。国の教育を興すには、先づ、この困難さを克服する事が肝心で、そのため、貧しい子等に社会的支持、援助を与える必要性を痛感した。しかし社会を同一化すること乃至は共産化的傾向には反対であつた。大衆教育の観念は、これまでに見られなかったものであり、彼は、一般大衆の教育こそ、文化の向上の最も大きな原動力であると考えた。これにより、各人が特殊な能力を見出し、更にのぼすために、常に頭脳を最良のコンディションに置くことになるからである。又、学問の純粋性を強調した。若しそれ学問が個人の名誉や利益のために存するのなら、或いは特定の目的のために利用される事になれば、それは本筋を離れたものであると説いている。これは現代にも通ずる思想である。

Erasmus, Lutter, Melanchton よりも更に進歩して、彼は教育機関を決して教会の手中にゆだねようとしなかった。教会を離れた、俗世間的なものこそ、自然な姿だと思った（しかし彼自身、無神論者でもなければ共産主義者でもなく、純然たるカトリック教徒だった）。かくて、彼の計画した Academia には教会の影響力はなく、科学を基底として、それに導かれる性質のものであり、その財政的援助を国家に仰いでいた。

教育に於ける新時代の創始者として、Vives は Comenius, Locke, Rousseau に大きな影響を与えている。この点でも、ひとりイスパニアのみならず、世界の教育者と云う事が出来る。

## Juan Huarte の 教 育 学 説

Vives の著書が出版されて半世紀経ってから、彼ほど国際的雰囲気来接する事はなかったが、恐らくは Ramus の影響を受けたと思われる学者 Juan Huarte が現われた。彼は 1580 年に出版された、Felipe 二世に捧げた著書で、これまた当時の国内の教育の実態を厳しく批判し、キリスト教の政策にたてついたかどで、宗教裁判にかゝった人である。Huarte はその思想に弾力性があり、又秀れたユーモアの持ち主でもあった。独創性に富み、未だ知られざる文化の原野を開拓する天賦の才があった。彼は、子供の才能乃至は素質を科学的に見分け、これに基づく教育の施し方に到達する手段として、生理心理学的考察を試みている。

Huarte は、Empedocles にはじまり Hippocrates に及び、Aristoteles、更に Galen により発展させられた宇宙哲学的見地に基いた生理学的学説から出発した。

水、空気、土地、火が宇宙の四大要素であるが、同時に身体にもそれに相当する四つの基本的気質がある。即ち血液（熱く湿っている）、粘液（冷たく、湿っている）、胆汁（熱く乾いている）、憂うつ（冷たく乾いている）がそれで、これら四つの気質の適当な均衡が健康を意味し、然らざるときは病気である。しかし、Huarte は均衡のとれた人間が此の世に存在しようなどゝは信じなかった。彼は、むしろ人間は一つの大きな病院であると考えた Democritus と、その考えを分かち合っていた。而して、その不均衡さの故にこそ、人間には進歩があるのだと考えていた。何故なら、人間をして、有用な存在たらしめるものは、或る力の、他の力の犠牲によるウエイトの増加、換言すれば病気及び異常な状態なのである。そう云う意味で、健康体であることは、中庸であることを意味する。

猶、彼は各個人或いは民族のかゝる基本的気質は、様々な要素によって左右されると観て居る。たとえば遺伝、水、気候、食物、生活様式、政治形態など。只、聖書に現れる Adam だけは均衡がとれていた。何故ならば天国では気候の変化もなければ食物の変化も、その他上述の要素の変化が一切無いからである。又彼の説によれば、子供はその才能のみならず、性までも、両親の栄養如何によるそうで、彼は、両者共、適当にコントロールする様忠告している。今から考えてみれば奇妙なことである。

Huarte は、Vives 同様、国民のすべてに教育を施す事を理想としていた。只、それは、素質のある者にとってゞなければ、如何に無用なものであるか、つまり学問は頭脳明晰な人の助けとはなるが、鈍物にはかえって害となり、不幸をもたらすだけであると信じている。尤も然らば如何にして或る子供が素質を有しているか否かを見分けるのであるか、又それは何時行われるべきであるかについては、極めて大きな問題を残している訳である。実際彼は大学生の成績を調査

し、上級生になる程、次第に理解の悪い者が居るのに気がついた。そこで、彼は三つの基本的な問題を指摘している。

第一に教育の目的は？ これは健全な身体と精神を持った人間を作り上げることである。そして、そのモデルは、キリスト教的、中世的理想ではなく、ギリシャ式なものである。これについて彼は、次の様に警告している。即ち知性を伸ばすための正しい食事（山羊の乳、蜂蜜、但し油類は才能のために非常に悪い）は、なる程賢明な人間を作り上げるが、身体が虚弱になる。これを Hippocrates の推薦する食事に従えば、肉づきよく、ばら色の皮膚で如何にも健康な人間が出来上がるが、頭脳の方はうすのろである。そこで、身心共に健全な人たらしめるには、良い食物を食べ、戸外で、暑さ、寒さに身体を鍛えるべきである、と。

第二に、教育の内容及び教授方法を、生徒の夫々の能力に適合させることが必要だとしている。彼は上手に各人の心理分析を行い、能力を色々と分析している。たとえば理解力はあるが記憶の悪い者、習得能力はあるが、それを組織づけ、体系づける事の出来ぬ者、知識は得ても、これを実際に応用出来ない者などである。彼は又、年令による学習内容をも規定している。彼の意見に従えば、年令が人間の気質を変える。幼年時代は暖にして湿、物事の受け容れ、記憶、賞讃、恐れ、従順などに極めて適している。そして、その結果習慣を形成し、言語を習得するのに適している。少年期は力、慎重さのバランスのとれた時代で、論理学と修辭学を習ぶに適している。青年時代（25才～35才）は熱く乾いており、大胆で強烈な情熱、尊大さ、快樂と憎惡の時代である。壮年時代（35～45）は、静かな、調和のとれた人生の第二期であり、次に老年時代で、乾にして寒い気質となる。これが人間に慎重さ、正義感と平静さをもたらす。

教科目については、彼は、或る科目は記憶を必要とし、或る科目は理解力を、又或科目は想像力を必要とする場合があるが、これらの能力が各個人により、明らかに異っている事を認めている。従って教育は各個人の能力乃至は素質に適する様指導するのでなければ効果がないと云っている。プラトーの様に、彼は各個人が自分の専門を選ぶ様希望している。何故なら誰でも何か或る一つのものには適しているからである。只、問題は如何にしてそれを見出すかである。

第三は方法論で、Huarte はプラトーの云う様に、魂が世界に神の知識をもたらすものであり、而も我々は大自然から学ぶのではなくて、人間の言葉によって学ぶのだとするのは正しくないと云っている。その訳は、我々はアリストテレスの云う如く、観察により知識を得るからである。しかし人間の心はそのための道具であるから、又それが各人によって異ったものであるが故に、我々はその夫々に対して正しい方法を選び出さなければならない。ソフィストたちは誰にでも何も彼も教え込むことが出来ると思つたのは間違いであつたと述べている。尚 Huarte は、英国式な、子弟を家庭から離して教育を行うと云う思想の先駆者ともなつた。この方法は、子供をし

て早く世間を知らしめるに役立つ訳である。

先述の三つの心的能力の彼独得の配分は、教育者として注目すべき点である。

子供の記憶力を増すために、彼は反復と模倣を主張した。これにより教科目は、先づ言語と文法であり、更に法律、神学と云ったところだった。法律では規則の暗記が必要であるが、これが非常に記憶力の訓練に役立つし、神学では、教義問答のリサイクルがこれまた有益だとしている。これに、更に算術も加えられた。これは恐らく子供が機械的に、充分理解もしないで、計算することが出来る様になると信じたからである。又、理解力をつけるためには、彼は哲学、論理学、倫理学、応用法律などを薦めた。彼によれば、想像力は生命と力の調和であり、均衡であり、事物を比較し、その相対的価値を見出す能力であり、正しい時と、正しい行動を選ぶ能力である。従って彼が、詩歌、弁論、音楽、絵画の他に、幾何学、兵法、政治などを加えたのも、有意義である。しかし、彼のこの教育の理想は、当時の人々には理解されなかった。

以上は十六世紀の主な教育者であったが、更に、イスパニアの教育史に残る人物は無数に居るけれど、到底限られた紙面では言及され得べくもない。たゞ二、三の人物の名を挙げれば、先づ古典学者 Pedro Simón Abril で、彼は1589年、Felipe 二世に宛て、当時の教育制度を批判し短い覚書を送り、その中で、教育の墮落ををげている。彼の、教育に関する主張は、即ちアリストテレスの説に基づき、王国内の教育を、内容、方法共に、国家の手から、民間の手にゆだねるべきだと云うことで、更に、学問は、一切外国語を排し、自国語で教えるべきだ、そうでない時は、自国語の危機を招来する事になり、有害此の上もなし、又、試験のための詰め込み勉強は好ましくないと述べている。此の時代にも、やはりこうした傾向があった様である。修辞学について、彼は、その利点を、それが大衆をして民主々義的気風に馴れて来る様にさせる点に求め、その欠点は、若しそれが、政治や、正義を必要とする事柄に應用される時に生ずると云っている。この根拠は、乃ち一般大衆は正当な権力で以て治める方が、修辞を弄した、実のない説得よりも一層効果があると考えているということである。これまで、よく云われて来ているが、イスパニアには秀れた芸術家が大勢居るが、古来、科学者としては、その割に少ない。と云うのは、これまで、高度の教育価値を有している純粋数学は、それが直接利益をもたらさないと云う理田で、その教育研究が怠られていたからであった。従って此の時代にも、技師、建築家、航海士などは不足していた。自然科学は、理論だけ教えられたが、実際、應用される事はなかった。従って、農学を学んでも、実際科学的な農業経営は知られなかった有様である。そこで彼は、この点に着目して、すべての学問に、実践的裏づけを行う様提唱した。医学に例をとれば、特に解剖学に力を入れるべきだと主張した。更に書の科目については、神学は原書に基くべきで、解説書に基くべきではないこと、法律は、ローマ法の代りに、イスパニア国内の法律に基くべきであることを

主張している。次に挙げるべき教育者の名前はベネディクト派の僧侶 Pedro Ponce de León (1584) で、彼は特に、これまでに見られなかった聾啞者の教育法の発見で、忘れ難き存在である。彼の弟子 Juan Pablo Bonet は、この教育を生かして、異常児の実経験を基にして、その研究を1620年発表している。

Ignatius Layola をはじめ、エスイタ派の僧侶共も、前者に劣らず、イスパニアの教育に少なからぬ貢献をしている。Loyola の教育方法は、Ibn Arabi や Lull のと同様、神秘的性格を帯びているものだが、当時勢力を得ていたルネサンス、ヒューマニズム、宗教改革の精神とも可成りうまく結びつき、融和していた。彼の Ratio Studiorum (1599年) では、教師は即ち伝道者であり、精神病担当の医者であり、又警官でもあった。子供たちは、この世の悪徳から守るため、家族や、社会から「隔離」されねばならないと述べ、教育は、予防的、治療学的性格を有すべき旨を指摘している。道徳教育は、ペルシャ的、キリスト教的な、魂と肉体、理性と情熱の二元論に基いており、これが人間生涯を通じての戦いで、この戦に各個人が勝手に自己指導乃至は制御を行って打ち克つ事は不可能であるが故に、一途に、盲目的従順さを頼りとして、これにより勝利を得ようと望めばよいと説いた。教科目としての歴史、古典文学のテキストは、カトリック教義にのっとって改められた。

かく観察してみると、十六世紀のイスパニアの精神的、内面的状態は、西洋でも珍らしく混沌たるものであった。イスパニア古来の精神と、イタリー、フランス、オーストリーなど、外国の精神との絶え間なき闘い、抽象的な形而上学と生活経験とのたゞかいの時代であった。

十六世紀のイスパニアは、外面的には繁栄している様に見えたが、すでに、政治的には衰退の兆を示していた。これまで、新大陸の発見に続いたイスパニアの異例の膨大さに、国内は疲へいし、遂に来たるべきものが来た感じが十七世紀の姿であった。新大陸から入って来た金銀などは、国内に止まらず、やがて工業の盛んとなり始めていたフランスやイギリスへ渡ってしまったために、国内での貧富の階級の差は甚だしいものがあった。宮廷では虚栄に身をゆだねる一方、路頭には、その日の生活に困る人々がさまよっていた。イスパニアは、いたずらは過去の軍事力の偉大さに郷愁を感じ、現実処する策を知らないかの様だった。この当時に出た文学作品などを見ても、又、イスパニアに流行したバロック時代も、この有様を如実に物語っている。学問は依然として、神学、倫理学、法律学など、或いは古典の研究が主で、自然科学系統の研究は振わなかった。エスイタ派の僧侶たちは中等教育に新しい組織を与えたのであったが、教育は飽くまで、支配階級者を対象としていた。大学は、その数も漸次増加して、三十有余校になっていたが、その中の大部分は、大学とは名ばかりで、野ざらし状態になっていた。学問研究も、各種の政治的、



宗教的制約から、往時の生彩さを欠き、更に図書の検閲制度などが、独創性或いは一層掘り下げた研究を行うのを阻むことになった。一方教授陣についても同様で、彼等の民主的選挙制度（博士や学生により講座担当者は選挙された）も次第に墮落し、教授の椅子は、賄賂や、自分に投票してくれた人への、聞くも汚わしき恩典などによって支えられている有様だった。講義の内容自身にしても、たとえば Salamanca 大学では、天文学を、プトレメウスの学説にまで後退させて平然としていた。又、国状の変化に従って、これまでにあった中等学校も衰退の一途をたどった。現に、Felipe 四世は中学校の数を制限しようと考え、小さな町や収入の少ない町には、経費の理田から学校での授業を禁止した。又、当時の思想の一大傾向は、国家が、反宗教改革的気運に巻き込まれていた事で、カトリック教徒らは、しきりに、これまでの名誉挽回に、献身的な努力をし、海外にまで布教を行うなどした一方、この、イスパニアの昔の宗教で以て、国家の精神的統一を行おうとした。宗教の勢力が極めて強力であった当時のこと、たとえそれが僧侶であろうとも、如何なる思想も、カトリックの教義に反するものは嚴重に処罰された。いわゆる宗教裁判がこれで、この迫害に遇った者の中には、学者にして詩人であった Fray Luis de León や Nebrija, Arias Montano, Gracián, Mariana など著名な人士が居た。

宗教裁判は、宗教的統一を目ざしていた事は勿論であるが、これが政治的に、国王により利用される事が常である。絶対君主制度、重商主義は、夫々政治的、経済的中央集権化を目ざしており、これまでの地方自治や中世的宮廷の民主的な思想は、武器と法律により、やがてオーストリア王朝の権力に圧倒されてしまった。国民の生活は、すべてにわたって、王の手中に帰し、言論の自田なども奪われた結果、学問の発達にもマイナスとなった。国内に於ける思想家は、或いは国外に移住し、或いは神秘主義に傾き、或いは空想の世界へ身を投じた。不思議な廻り合わせて、こうして祖国を去って海外に渡った人々から、イスパニアは非常な利益を得た。彼等は海外にあって、自己の思想を自由に表現し、出版することが出来た。神秘主義者にしても、これは、云わば精神的移住である。架空の世界へ逃避した人物は、主として作家であった。彼等は、皮肉、ユーモア、或いは故意の沈黙により非難を巧みに切り抜けつゝ、当時の社会批評を行った。文学に於ては、十七世紀は黄金時代と呼ばれているが、この原因も、多分に、抑圧された思想への反撥として作家たちの意気の高揚された事にある様である。当時流行した悪漢小説は社会の諷刺以外の何物でもない。Cervantes も Quevedo も、表面こそおだやかだが、極めて痛烈にイスパニアの社会諷刺を行っている。

## 十八世紀の思想的背景

十八世紀になって、イスパニアはフランス・ブルボン王朝のルイ十四世の子孫四人に統治され

ることになったが、これが、此の国に新しい空気を送り込んだ。ルイ十四世と云えば、絶対君主制の権化である。宗教上は依然としてカトリック教を唯一の公式宗教としていたが、事、国王の権力に関しては、法皇と云えどもこれを压えることは出来なかった。国内に於ける一切の活動（宗教活動をも含めて）は国王の掌中にあった。強力な中央集権化がはかられ、政府の役人は、国王の意志の忠実な伝達人に他ならず、地方自治は、最初の王位継承戦頃から失われ、大学の特権も自活も圧迫された。これにはエスिता派が大いに反対し、大学が教会の下にある限り、自由でなければならぬと主張したが、容れられなかった。かくて大学は国王の後援する国家の管理するところとなり、王は指導者を各大学に送った。彼等指導者は、学長と同等の権威を有していた。やがて、国家は高等教育の独占を行うに至り、単科大学や尼寺学校などは、学位を授与する権限を持たぬ様になった。大学は、その講義科目を自由に選ぶことが出来たが、試験や、それに従う学位の授与、更には教授の任免まで国王が行った（1769～1770年）。去る1742年、マドリードの教職員は *Fraternidad de San Casiano* を作り、爾後公共初等教育の全般にわたって、又同時に教師の資格証書授与についても一種の独占を行っていたが、ブルボン王朝の諸王は、この *Fraternidad* にも統制を行い、特に政府から派遣された監査官を置いた。この様にして1740年には遂に *Fraternidad* は廃止され、初等教育は全面的に、国家の管轄となった。廃止された会に代って、1780年には *Colegio de profesores*（一種の師範学校）が登場した。又、教育をかねがね宗教から切離そうと考えていたブルボン王朝の所期の方針に従い、その代表的な存在であった旧教を1767年駆逐した。

然し何と云っても、十八世紀を特徴づけるものは、人間の理性への信頼、科学、発明発見、進歩であらわされる人間の活動ぶりであり、出来る限り大勢の国民に知識を賦与し、彼等の生活の向上をはかろうとする傾向の強まって来たことである。カトリックの教義は保持しつつも、理性に走るのが、この時代のイスパニアの姿であった。啓蒙された一般大衆は、やがて第三階級者としての地位を固めることになったが、彼等は、古い貴族階級と下層階級とのバランスのとれた存在であり、国内の政治的、文化的活動に、主要な力となった。

教育制度については、その計画には先づ公共初等教育の拡充が挙げられた。Carlos 三世は各町に男子、女子共、新しく学校を設ける様命令した。教育の目的は、実用的なものに在ったようである。たとえば男子は小説、詩など、凡そ実役をもたらさないものは読むべきでないとか、女子は清潔にして、つゝましやかに、そして手芸などの上達をはかるのが主たる目的であるから、読書にしても、若し女性が読書したい希望を持っているなら、教師は彼女等に読み方を教える義務があった。が、書く方については、何も触れられていないところから、女性には余りこれは重要視されなかったと考えられる。

1770年には高等教育の教科内容が拡充され、これまでの学科の他に、実験物理学など、科学部門が新たに加わり、更に、アラビア語、ヘブライ語、数学、論理学、哲学、自然法などと併せて、ここに、学部が現われて来た。古い大学制度では、講義自身も、狭い内容であったが、急速に間口がひろがった形である。それより先、1753年には講義はラテン語で行われる様規定されていたが、次第に此の制度も強制されなくなってきた。政治的、文化的影響を多分にフランスから得た十八世紀のイスパニアは、隣国同様、批評、百科辞典、総合知識の時代を迎えて、学問も盛んになった。貴族的なサロンの流行や、アカデミアの創設も、水ぎわだった出来事であった。ブルボン王朝の国王たちはイスパニアに、科学研究所、技師養成所、実験室、植物園、古文書保存所、図書館、博物館などを作り、フランスの文芸や法律をも導入した。探険への意欲が盛んになったのも此の時代であった。

1795年には医学部が新設され、同時に病院が建てられた。その時1793年には農学部も発足していた。印刷技術の向上に伴い、新聞の発行部数もうなぎ上りとなり、諸外国の学者が大学に招へいされ、外国の図書も翻訳された。こう記述すれば、学問の進歩が、極めて急速になされた様に思えるが、しかし実は、この文化の普及は比較的上層階級に限られていた。従って依然無学文盲者は少なくなかった。此の世紀の末葉には、啓蒙運動が漸く活発となったが、この折も折、フランス大革命がおこった。その結果、イスパニアでは新聞その他出版物の検閲が行なわれ、1791年には新聞では *Diario de Madrid* 以外、すべて発刊禁止となった。憲法、自然法、国際法の講座は1794年、危険な思想を植えつけると云うので閉鎖された。青年の旺盛な知識欲も無げに抑えられ、教育は、応用科学及び初等教育に力が入れられただけだった。しかし、思想的に危険性のないと思われる部門の改革或いは更新は歓迎された。Carlos 四世の大臣 Godoy は教育に熱心であった。彼の努力で化学、植物学、薬学などが、各地で学ばれる様になった。時に1804年のことである。彼の弟子たちはイスパニアに Pestalozzi を紹介した。彼の著書も各国語に翻訳された。教科書も新たに出版され、小学校の数は増えた。しかし教師は依然としてその報酬が極めて少なく、子供たちから授業料を徴集せねばならぬ有様で、勢い、恵まれた学校を選ぶのにやっきとなっていた。こうした状況の下に、宗教団体の学校は除々に勢力を得はじめた。イスパニアの教育の歴史は、これまでも見て来た如く、色々と計画は漸新なもの、建設的な、理想的なものであるが、実行となると、常に失敗に帰し、結局は、宗教的勢力の下敷きにならねばならぬ運命の歴史でもある。此の時代の代表的教育者はベネディクト派の Martín Sarmiento 神父と B. J. Feijoo 神父であった。彼等はカトリックの教義内で、迷信を攻撃し、初等教育の普及に力を入れた。Jovellanos (1744~1811) も、政治家であり、思想家であると共に立派な教育家であった。学校を建て、農業改革を行い、又政治的改革をも企てた。これまでの教育論が、単なる教授法の

冊子か、或いは中世の伝統にインスピレーションを得た貴族を対象とした論文位のものであったが、この頃となっては、Pestalozzi に代表される社会の下層部の子弟の教育に重点が置かれ、これまでの貴族的、排他的思想から次第に離れて行く、過渡期的現象を呈していた。

### 十九世紀の教育界と F. Giner de los Ríos

フランス大革命に続いて1808年、イスパニアに侵入したナポレオンの軍隊は、国内で色々な批判や或いは歓迎の声を聞きつゝ、此の国の政治上、文化上、大きな影響を及ぼすことになった。ナポレオン政府は、教育の普及に力を入れ、特に、これを教会から独立させる事に努力した。教団の勢力を抑え、自由な小中学校を各地に設け、美術を中心とする教育方針を明らかにした。この事自体には異存はなかったが、只、この制度が外国人によるものであるだけに、反対の空気を助長し、1812年の Cádiz の国会では遂に国家の主権が、イスパニア人の手中にある旨宣言するに至っている。此の Cádiz の宮廷のとった教育政策も、あれ程批難しつゝも、これまでのイスパニアに生き続けて来ている古来の伝統に従わずに、フランスをモデルにしている。この国の文化的水準の高さが、結局こうさせたのである。かくしてイスパニアは中央集権化され、画期的な教育制度が実施された。こう考えてみると、この国程、かくも度々諸般の制度に改革の行われた国は少ないであろうと推察される。国民こそ、大迷惑であつたろう。十九世紀のイスパニアには、その他にも数多の大小革命や戦争がおこっている。新しい思想と、教会のもつ依然として古い反民主的、絶対主義的思想が衝突した訳で、彼の Cádiz の宮廷の力も、数年にして、再び教会の勢力下に置かれる運命となり、その短命をなげくばかりであった。再び起った反動政治は、かえって、国家にとっては逆効果であった。有能な人材が、次々と倒れていった。1812年の自由主義的、民主主義的法制はくつがえされ、旧式の制度が復活した。ヤソ教徒らはその数も増し、彼等の学校を改善した。学問の分野では科学、農業、美術の研究に重点が置かれた。科学に対する一般的研究熱は、王宮でもスイス人教師が化学を講じた程であつた事によっても伺われる。1818年には、貴族のための学校がマドリッドに設けられた。教会が、国家に代って教育を独占しようと望む様になった。しかし、すぐ又、ほんの僅かの期間ではあるが(1820~23)自由主義者が1812年の法制をとりもどした。去る反動政治の折、倒れた人材の中の数少ない生残者が、この運動の支柱となっていた。次に再び反動の時代が到来し、約十年間続いた(1823~1833)。今度はそれも極度に反動的で、先づ、思想的に危険と思われる外国図書は残らずこれを焼却せしめ、続く1825年には、初等教育に関する法律が制定されたが、これによると、カトリック教徒でない者は、教師になることが出来なかった。大学の自治も奪われてしまった。学校では、宗教学が必修科目となり実習が伴われた。これで、若し後にもわかる様に、学生達の暴動がなかったら、事態は更に

ひどくなっていたかも知れなかった。

1833年、Ferdinando 七世の死と共に、追放されていたイスパニアの自田主義者たちは、改革への希望に胸をおどらせて帰国した。そして1835年には自由主義革命をおこし、尼寺、宗教学校の閉鎖を行ない、続く36年には Mendizabal 大臣により、ヤソ教徒の追放が命ぜられた。国外追放中に学んだ人々の建設的な改革は、政治的にも中庸を得て、その教育目的にも近代的な点があったが、流石に中央集権的な統一的なものから脱却することが出来なかった。1845年の、Pidal の教育計画は、保守派の人物の手になったと云え、完全に教育を宗教から離そうとした、進歩したものだ。一方、1838年には、英国に住んでいた Montesino の発案で師範学校、看護婦学校が設けられ、1841年と1849年には初等教育視学制度が設けられ、1847年には教師に対する一定額の報酬が決められた。Gil de Zarate も追放からカム・バックして教育局長に任ぜられ、1857年には普通教育法を立案した。これは、フランスを範としたもので、小学校から大学に至るまで適用された。国立学校は、これにより一応規制されていたが、私学については何も触れられてもいなかったのもので、私学に於ける教育の自由乃至は外部学生のための試験などに道が開かれ、こゝに私学は発達していった。しかし又も1866年、女王イサベラ二世の反動政治によって、事態は急変した。成る程1857年の法律は廃止にこそはならなかったが、師範学校などに圧力を加えることによって、事実上これを無効とした。Madrid 大学から教授の座を追われた人々も居た。彼等の中には有名な Sanz del Río, Salmerón, Giner など、ドイツの哲学者 Krause の理想主義に共鳴する哲学者が居た。しかし、二年後には再び革命がおこり、師範学校も再開され、追放されていた大学教授は元の講座に帰って来た。学問の自由主義の表現として奨励された。翌1869年には、Fernández de Castro により女子教育会なるものが設けられた。新しい制度の下では、大学に於ける神学教授は抑えられた。これは僧侶たちは、自身のゼミナールがあるのだから、無理に、こんなところまで講座を拡げる必要はないと云う云い分に基いている。が、何れにしても、一方がよければ他方が悪く、お互に極端に走る傾向にあるのは、これまでも度々くり返して云う通り、此の国の特異な性格である。一時は落着いたかに見える政局も、全く秋空の如くに急変する。1896年、新憲法が制定され、信教の自由、良心の自由、及び個人の一切の自由が保証され、人権が尊重されて、平和な時代が来たかに見えたが、追放された イサベラ女王に代って誕生した新しい王朝 Amadeo de Savoy も政治家は勿論のこと、一般国民の支持を得ずして遂に退位を決意し、1873年には、共和国が成立、しかしこれも短命で、内外に矛盾をはらんだ此の政体は、再び軍隊による暴動の末、1875年には追放されていた。女王の皇子が Alfonso 十二世として王位についた。十八世紀には一時盛んであった科学研究も、イスパニアに於ては、この様な、相次ぐ政変のあおりを食って、下火となり、人々の知的関心は、専ら文学、哲学、法津など、文

科系統に向っていた。革命、内乱、無政府状態のくり返しの後に再現した王制復古は、極めて反動的な性格をもっていた。知識階級者はこれに反対したが、彼等は危険思想の持ち主として追放の身となった。追放された者の中には、既に名を挙げたことのある Giner 教授が居た。彼は Cádiz の牢獄に送られた。

### Francisco Giner de los Ríos の理想

王制復古の結果二度目の追放を命ぜられた Giner とは如何なる人物であったか。既に見た如く、極めて熱心な思想家であり、教育家であった彼は、哲学者 Sanz del Río の弟子であった。彼は1839年、Ronda の地に、有名な政治家 Antonio de los Ríos Rosas の娘を母に持ち、税務官の息子として生れた。長じて、Bardelona 大学に入学し、Granada で決律の学位をとった。彼の恩師の中、最も感銘を受けたのは、カタルーニア出身の哲学者 Francisco Javier Llorens であった。彼の正直さと、公民精神が、彼 Giner に大きな影響を与えた。もう一人の忘れ得ぬ恩師は Francisco Fernández y González で、彼は文学者であると共にオリエンタリストでもあった。彼はをオリエンタリストには仕上げなかったが、語学に興味を覚えしめ、ドイツ語を習わせた、更に独文学、独哲学なども学んだ。古典音楽にも興味を持ち、モツアルトにひかれるなど、極めて豊かな趣味を有していた。1862年頃は、まだ Granada に居り、大学での講義のかたわら、読書に耽り、特に Kant, Hegel, Abrens, Krause の哲学に興味を覚えた。教壇にあって、彼は常に学生に一日に一度は外国図書に目を通す様すゝめるのだった。これは恐らく、彼が学生時代に愛読した Revue de Deux Mondes から得た貴重な知識を思い出してのことであつたろう。彼は1862年、Granada で出版された Revista Meridional の副編集者をつとめ、早くから、文人、思想人としての才能を世人に見せた。実際この雑誌は当時の著名な学者、詩人なども寄稿していた程で、権威あるものであったが、Giner が Granada を去るに及んで、この雑誌も次第に衰退し、遂に廃刊となった。こと左程に、彼の努力は大きかった。1863年、彼は Madrid に来ていた。こゝでは彼は哲学的立場に立って文学及び法律を専攻する青年だった。1868年、コンクールの結果、彼は Madrid 大学で法律の講座を担当したのであった。

Giner を中心とした、追放された大学教授や二、三の自由主義者、科学者、政治家は、1876年 Institución libre de enseñanza を、最初私立大学として創立した。如何なる宗教団体の教義或いは利益、哲学の学派或いは政党とも無関係で、自由と、科学の不可侵性と、教師の思想と研究、及び知識の伝達の自由、又如何なる権威の干渉をも受けないことを標榜している。この Instituciónこそ、十九世紀のイスパニア教育界に於ける画期的役割を果たした学校であった。幾多の傑人を出したこの学校は、目まぐるしく変遷する思想の波間に、き然としてそゝり立った磐石

にも似ていた。

然しその *Institución* も、発足した当時は、大学としては人材が足らず、一時は国立大学受験予備校として甘んじなければならなかった。かくて、遂に高等学校乃至は中等学校となり下った。Giner は献身的な協力者と共に、此の学校をして、平和と自由思想をたのしみ、家庭的な雰囲気、相互の理解を深めようとした。彼は、教える者が、自から範を示すのでなければ、教育の価値はない事を自覚していた。校長と呼ばれるのを好まなかったと云われる逸話にも彼の性格の一端が伺えよう。彼はアラビヤ人の様な肉体と容貌を有し、近代化されたソクラテスの様な暗示力と鋭い論理を有し、又、燃ゆるが如き、ロマンチックな情熱をも併せもった、ストイックな、平静さをも有していた。哲学では Schelling の一元論にひかれ、社会、政治問題では恩師 Sanz del Río によりイスパニアに紹介された Krause の思想に大きく影響された。宗教では、青年の頃はカトリック教徒だったが、後、神秘主義、儀式、教会などを離れた、自由な立場でのキリスト教徒であった。彼は社会を不断に変遷してゆく過程にある一有機体だと見做し、法律、成文化された条項よりも事実によって示されるところの社会意志だと考え、政治、を社会を改善し、更に磨きをかけるべく運命づけられた開拓事業であると見ている。開拓者としての政治家は、同時に教師としての役をも果すのであり、又、すべての市民が、生活の各分野で、種々な形態に於て為政者となる。政治を行う事は則ち教育する事で、その機能は同一である。犯罪、その他の社会不正義は報復により矯正されるものではなく、それ等を或種の病気であると見て、然かるべく処置すべきだと主張している。選挙の際の投票権だけを有する民主主義はその実質に於て疑わしく、不完全なものであると Giner は云う。彼は民芸を愛し、民衆の本能を愛した。決して社会的良心を疑わなかった。彼の人生に対する態度は、隠遁者のでもなければ、エピキュリアン的なものでもなかった。寧ろ、ルネサンスに於ける様に、人生を充分楽しみ、同時に健康と力と、努力の精神を養うことをモットーとしていた。が、彼の楽しみは、クラシックな、キリスト教的なものに基礎を置き、安定したものであった。成る程彼は科学を信ずると云ったが、それは、彼が理性の崇拜者であった事を意味するのではなかった。彼は十八世紀を讃えたが、その哲学的外観が、如何に子供っぽく、一方的であったかを知っている。だからこそ彼が、前世紀と共に、十九世紀のロマンチックな、保守的なものを愛したのであり、教育、政治に対する彼のひかえ目な主知的な傾向も、それを如実に物語っている。

*Enseñanza y Educación* (教育と教授法) でも云っている如く、知識は光を与えるが、人間の温かさ、正直さ或いは寛大さは々我に与えてくれない。Giner は、自分の時代には敢えて革命をおこさなかったが、その代り、自分の教えた、次の世代の若者たちに、将来のイスパニアの発展を託し、祖国を救い、盛り上げてゆく者は、青年に他ならないと、その指導には極めて熱心で

あった。

彼の学校は、Plato, Vives, Locke, Roussau, Pestalozzi, Froebel, Herbart などの主義を具体化する場であった。そして又、英国の思想にも大きな影響を受けた（彼自身英語が得意で、英書に親しんだし、1884年と1886年の二回にわたり、英国に赴いて Browning, John Bright, Lowell などの思想家と親しくなっていた）。彼には、大陸に於ける学校教育が、主知主義の産物であり、その知識も、詰め込みで、試験が済めば忘れてしまう様な、些かも自分の身についていない、宙に浮いたものゝ様に思えた。当時すでに Giner は男女共学論をとんでいた。彼は、この方が学問の振興に強い力となると信じていた。

Giner の生活と思想については既に幾分か述べたが、Institución の内容についてはまだ、殆んど何にも述べられていない。

この学校のプログラムとして先づ挙げられるのは、身心の鍛練と云うことである。一方に偏した能力は奇形であり、完全なものとは云えない。「凋れて生命力に乏しく、健康良ならず、憂うつで孤立したインテリ青年が若し居たとすれば、その青年は既に早熟な老人であり、只の一回の官能の誘惑の飢食になりやすい隠者の一種である。」又、初等教育と中等教育はこれを分離せず、一貫性を有せしめ、更にこれは、同様な方法で以て大学にまで結びつけるべきであるとされていた。授業は、教師と生徒とのうち解けた会話から成り、その中で教師が「直感的方式」によって、生徒に何物かを自から覚らしめるやり方であった。更に云えば、それはソクラテスの対話式教育法で、抽象より具象を、言葉よりも事物を尊重し、教室はすなわち作業場であり、教師はその指導者で、生徒たちはその家族ど云った関係であった。教科目は、伝統的なものゝ他に、人類学、工芸、社会科学、経済学、美術、音楽、図画、工作があった。遠足、旅行が奨励された。体操よりも遊戯が薦められた。芸術史は書物によるよりも、旅行により、実際に史跡を観察する方が有効な方法だとして、大旨その様にされた。人間としての教養、人格の修練が、学校教育の主要な事業であった。彼は、兼ねがね、愛国心を持つ事は良いが、それが国家の弱点をカバーするためのものであってはならぬと云っている。学内だけではなく、学外の指導にも力を入れ、子供の犯した過は罰することなく、これを矯正し、改めてやらなければならぬ。子供の性格や傾向を知るに最も適しているのは屋外での遊戯、その他自由な活動だとし、Institución では、そのため英国から団体競技を導入し、イスパニア古来の遊戯をも復活せしめた。これによって、日曜日など、生徒たちは山野へ遊びにゆき、又冬などはスキーを楽しむ様になった。

Giner は又、Institución の生徒たちに遵法の精神を教え込んだ。教育に及ばず大きな力は教師の人格と学校の環境乃至雰囲気だ。作法については、彼は Spencer の云う様な、貴族階級者が自から下層階級者と区別する為に便宜上設けた柵の様なものだとする考えとは違って、人間関



係を維持する上に必要な、必然的なものであるとしている。階級意識は良くいが、高尚な気品だけは持ちたいと彼は考える。資産家の子弟と貧しい家庭の子弟が同じ教室で勉強する事が、社会的、道德的見地から必要であるとした。教育は心のアリストクラシーを目ざしはしても、その門戸はすべての人に開放さるべきである。階級による差別は宗教の差別と同様、極めて有害なものである。試験は子供等の学習方法を台なしにし、又、学習態度をも変えてしまうから有害だと判断し、又、教科書も有害で、子供らが読み、聞き、或いは旅で、或いは研究室で観察した事柄をまとめ上げたノートを頼りにすべきであると主張した。賞品、賞状など、報賞制度は（エスिता派の者共はこれを是認していたが）確かに子等の激励策ではあろうが、これは、虚栄心やせん望を招く結果となり、利益をもたらすよりも害の方が多いため、行なわれなかった。学校で使用する諸々の用具も既製品では何の役にも立たない。これは教育の機械化で感心出来ないから、すべからず、これらは教師により考案され、生徒らによって、学校で作るべしと云うのが Giner の考えであった。

倍、宗教、特にカトリック教と教育の関係は如何にと云うに、カトリック教徒等は、学校教育に宗教々育を包含せしめる必要があると、これまで、しきりに強調し続けて来たが、Giner も宗教を個人の内的生活の一樣相として重要視し、これを教育にとり入れたい考をもっていた。しかしカトリック教徒の云う宗教教育と Giner のそれとはその内容に於いて大いに相違していた。前者は排他的であり、攻撃性を有しており、その一例が、カトリック教徒でない教師の良心は、これを尊重しなかったり、父兄らも、つい1913年まで、彼等の子弟を、宗教教育から解放させる事が出来なかった事であった。これに反し、Giner は Sanz del Río に従い、なる程宗教は、此の人間社会の秩序に順応せしめる様、子供らに教えることが必要だと認めていた。人生の至高の理想と、人間間及び人間と大自然との調和へ導く宗教、その宗教的精神なくしては教育は無意味であることは認めてはいたが、それは決して特定の宗教の教義にかぶれる事ではなく、それから全く解放されたもので、又、如何なる別個の自然宗教の様なものを作るものでもないと信じていた。彼は、あらゆる宗教に共通する根本的要素を発見し、それに基いて互に他の宗教を理解し合い、寛し合う事こそ人間としての道であると考えた。従って、宗教上の争いを避けるため、学内では決して宗教活動を行うべきではないとした。学校は飽くまで平和な学究の場であり、宗教や政治上の闘争の場であってはならない。実際宗教活動は、我々日本人が考えている以上に活潑なもので、現在に於てさえ、大学内での活動は極めて活潑である。かくて、宗教上の諸問題を解決するには、彼の様な、如何なる宗教とも相互尊敬の念の上に立って理解する覚悟のある教師が必要なのであるが、実際は、彼の希望は容れられなかった。左翼と右翼は夫々、自己の実力の不足を怖れて、他を容れることをしなかったのだった。此の様な理由で、Institución はカトリッ

ク教徒たちから激しい反対をされた。

ところで、Giner の教育理念はそれが英国的傾向のものであったため、当時フランス式な教育方法を採用していたイスパニアに於いては余り欲返されなかった。丁度乱世に於ける聖者の声の如く、彼の設立した Institución はその素晴らしい内容にも拘わらず、如何なる政党も、この学校を支持しようとせず、神秘的存在として敬遠した。しかし、極く少数の人々は、この小さな好意を寄せ、卒業生と共に、その精神を内外に拡めようと努力した。彼等の中には政治家として Costa や Azcárate が居り、又、Macpherson, Quiroga, Calderón, Bolívar 等の科学者は此の種の学問に新しい、近代的研究法をもたらし功がある。同じく卒業生に Sorolla が居たが、彼は Greco や Velázquez, Goya の純粋な国民的伝統をイスパニアの芸術に蘇らせて功績があった。かくて Institución は、政党、政策を超越して、イスパニア国民の共通した普遍的な要素を確立した点に於て、只単なる学校以上のものがあった。

### 十九世紀末以降の思想と教育

1876年の王制復古以後は、政治的には二大制党主義に基き、Cánovas と Sagasta の両党首の間の力の均衡が、国内に一応の安定感をもたらしていたが、全般的に見て、国民の民主々義的教育は極めて粗末なものであった為、折角満廿五才以上の男子には選挙権が与えられていたにも拘らず、その効果は芳しくなかった。又政治の内容自体にも、腐敗した空気が見え、汚職は日常茶飯事となっていた。賄賂による公民の買収が行なわれ、或いは甘い公約で国民をうまく釣るなど、その有様は想像以上のものがあった様だ。この頃になって、一方社会主義的思想と、いわゆる階級闘争が Pablo Iglesias の下に活潑となり、これによって国民も暫く政治に目覚めた格好であったが、民主々義の理解に至っては、依然未だしの感があった。これにはカトリック教徒らも尽力したが、結局一般大衆の偏狭さと無智と、更には、知識層と彼等とのギャップがこれをさまたげていた。此の時代は全般的に見て、政治家も、思想家も徒らに外国の様式乃至は体系の模倣に終始し、彼らの独創性は失なわれていた。そして、イスパニア古来の伝統を求むる事なく、崩壊しつつあった十七世紀の宗教的、政治的不寛容さを固執していた。十九世紀のはじめ、Costa の如き人物が、軍備拡張を避け、専ら農業の振興を奨励し、国内の文化と、物質的豊かさを増すことが必要だと説いた時も、彼はカトリック教徒、国粹主義者、近代主義者などの反対に遇った。政治上の諸理論はフランスを主とした外国の既製品だった。

偁、当時の教育は国家の事業として政府が、これを掌握していたが、教授法の自由は保証されていた。然し自由主義者たちは、私立学校にまで国の干渉が及んでいるが、これは飽くまで衛生、道徳に関するものだけでなければならぬと主張した。こゝで教会は、自由主義者が勢力を有して

いる時は一応これに同調していたが、保守派が勢力を得るや、再び往時の困難な問題を再現した。カトリック教徒らは、自分の宗教の教義を強引に教育内容に織り込もうとした。こゝに民主主義が再び危機を招く事になった訳である。憲法による信仰の自由と平等性の保証も、実際上は空文に過ぎず、カトリック教の如き大宗教がその他の弱少勢力を有する諸宗教乃至思想家を抑圧していた。こうしたカトリック教徒らの態度は、やがて、一部の、これまでは余り存在の認められていなかった反対者たちが、Krausistas 共を、暗黒と専制に対抗する文化と正義の戦士として推し立てる事となった。Krausistas とは、すなわちドイツの哲学者 Karl Cristian Friedrich Krause の学説、つまり Krausismo に共鳴したイスパニアの思想家等のことで、この Krausismo は、イスパニアに於いては、単にその主義、問題、解決を有する哲学体系であるにとどまらず、それ以上の何物かであった。それは政治、宗教、哲学に於ける異った形の合理主義的思想の結合されたものであり、スコラ学派的伝統と対立するものであった。その旗頭は先述の Sanz del Río で、彼の弟子が Giner であり、Fernando de Castro であった。

1867年以来、追放の身となっていた Krausist たちは、大学に戻り、再び講座を持つ機会が到来した。教育の自由の原則は認められた。彼等の努力により、王制下、教会からは余り好ましく思われなかったが、一般の公務員は宗教的、政治的イデオロギーにさまたげられる事なく、共和主義者であれ、無神論者であれ、公然とポストにつく事が出来た。

こうした政治的状况下にあって、物質的に恵まれず、人材に乏しく、技術的にも欠陥の少なかった諸々のコンディションにも拘らず、教育の改革は進んでいた。1876年にはフローベル幼稚園が設けられ、フローベル式教育法が導入された。更に同系統の小学校が1882年に新しく開かれ、又教育の恒久的指針として教育博物館が創られ、1887年には国家的な事業として、師範学校、小学校の教育に力が注がれることになった。1898年の米西戦争による植民地の喪失は、イスパニア国民に非常な打撃を与えた。国民は政治的解決に不信を抱き、これまでのイスパニアの姿をつくづくと省みて、ようやく、国民としての自覚と、教育に対する開眼を行った。国家百年の計を立てるべき時が到来した。がこれは困難な仕事であった。教育関係者で構成された委員会も、結局何ら為すところなく、その命は短かく、種々の改革の理想はあり乍らも、将来の改革のための一つの捨て石としてしか有意を持たなかった。1900年には公共教育及び美術省が新設されたが、これととも、これまでの政府の各省に新しいのが一つ附加えられただけの意味しか持たず、人材もなければ、技術的、科学的基礎づけがないため、いたずらに大臣の更迭が行なわれるのみで、これと云う基本的な改革は行なわれなかった。只、これが、これまで冷遇されていた教師の待遇の改善に大きな力となった事は事実である。結局、当時のイスパニアに不足していたものは人材であった。で、それ故にこそ教育による人材の育成が強く要望された訳である。処で、差当りそ

の育成を行う人材の不足になやんでいたイスパニアは、M. Bartolomé Cossío の述べた如く、先進国に学生を送って新しい知識を導入しなければならなかった。Cossío は、Giner de los Ríos の弟子で、Instituto に学び、後に母校の教師となり、Giner と共に、危機にあったイスパニアの教育に新しい息吹を送り込んだ人であった。Giner と Cossío の進言は、当時の文部大臣 Conde de Romanones の共感を呼び、留学生制度は確立した。尤もこれ以前に Felipe 二世以来、はじめての純粹に学問的立場から海外留学を許されたイスパニア人はあった。既になじみの Julián Sanz del Río がその人で、彼は Krausismo の研究のためドイツに赴き、Heidelberg 大学に学んだのだった。1904年には Madrid 大学に教育学講座が設けられ教育に対する関心と努力は漸く高まって来た。

海外留学生は1906年頃になって祖国に帰り、フランスやドイツなど、先進国の教育や科学の進歩の有様を讃え、早速これを国内の科学に導入すべく夫々の分野に活動を開始した。時あたかも自由主義政府が政権を有しており、教育の民主化に尽力した。信教の自由を宣言し、これを促進せしめた。当時のイスパニアは国民の約六十パーセントは文盲であった。自由主義者の熱心な教育政策と相俟って、カトリック教徒も学校を拡大するなどして、彼等なりに、教育の普及に貢献した。彼等が Granada 大学教授 P. Maniόν を迎えて、グラナダで、ジプシーの子弟に初等教育を施さしめた事なども、国民皆教育の点から、極めて意義のあることであった。

### 「科学研究振興会」と教育再建への動き

イスパニアの近代教育に最も功績の多かったのは、やはり、Giner と Cossío で、彼等の全く献身的な努力と熱意なくしては、恐らくは未だに混沌たる状態から脱する事は出来ていなかったであろう。Giner の創設した Instituto Libre de Enseñanza では、二人共自ら教鞭をとり、そこから幾多の有能な人材を出した事は既に見た通りであるが、他方、一般的な教育方針については、当時の自由主義政府の文部大臣に連名で建議を行い、次の様な基本的態度を明らかにしている。先づ第一に、若し此の世間に貴族と称せらるゝものあらば、それは則ち才能自体である。従って近代社会に於ける最大の力は学問であり、学校である。第二には、教育は国家にとって重要な事業ではあるが、これを決して国家の独占物としてはいけない。私学的重要性を認め、その自主性を認めるべきである。第三には、中央集権化、画一化、経験の不足、改革への恐怖心、厳格な外部からの統制、機械化、これらの諸事項は速かに除かるべきであること、第四には、教育に対する一般大衆の無関心さが格別であり、誰も彼も政治に心を奪われてしまっている様子であるが、これには、家庭に於ける教育よりも、先づ教師の側からこれを是正してゆかなければならないこと、但しこれは相当な時間と労力を必要とするが、仮令おそくとも、着実に進行せしめな

ければならず、これが為には外国の教育方法の長所を採用し、大いに参考にすべきであること。俵、この時 Cossío は、ようやく近代化していた日本をそのモデル国にしては如何んと、非常な熱の入れ方であった。尤もこれに対して恩師 Giner は批判的立場をとった。彼の意見は、如何なる外国文化の長所も、その処を得たものでなければ、やたらに模倣するのはかえって危険であり、有害であると述べている。Giner の態度は常に中庸を得ており、闘牛や追はぎの習慣を残すために改新を恐れる者のある事を憂慮し、又、同時に、美しい古来の大木を伐採して英国式に芝生にしてしまうところの近代主義者と云うか、革新のためになら、他のどんな大きな犠牲を払っても平気である者の居る事をも警戒していた。第五は初等教育に関するものであるが、国民皆教育は理想ではあるが、当時の現状としては不可能なことであった。これまでも見た通り、全国に大学と名のつく学校は数多創立されたが、結局は野ざらし状態になってしまった事にかんがみ、初等教育も、その学校の数、飽くまで教師の数と呼应するものでなければ無意味だとした。第六に、これは多少疑問があらうと思われるが、初等教育の義務性を否認している。彼等によれば、本当に学校が充実しておれば、子供らに強制しなくとも、自ら来る筈であると云うのである。最後に彼等は、この教育改革が一朝一夕にして成るものではないこと、そのためには、海外に学徒を送り、来るべき世代に期待をかけるべきだと結んでいる。

彼等の主張は容れられて、1907年、文部大臣 A. Jimeno は初等教育委員会、高等教育委員会の二つの機構を設け、これに適度の自治を与えることになった。他方、科学研究振興会 (Junta para ampliaciones de estudios e investigaciones científicas) なるものも設けられた。俵、初等教育委員会は、間もなく保守派のために抑圧されることになり、高等教育委員会は、やがて海外に留学生を送るはこびとなった。そして最後の Junta は以後、約三十年の間、イスパニアに於ける教育制度改革の重要な機関となっていた。他方同様な傾向をもつ機関が、小規模ながら Barcelona に設けられた。その名は Institut d'estudis catalans。上記の夫々は互に協力を惜しまなかったが、夫々の格好が異っていたところから、必ずしもすべてに統一がとれず、夫々、余り期待された程の活躍をしないまゝであった。前述の Junta にしても、はじめは、政治家たちからも充分理解されなかった。警官を任命するのと、科学研究奨励金を渡すのとを同一視する程だった。しかし、これは元来政治或いは政党とは直接何らの関係を持つものではなかったので、彼等の認識が足りなかった訳である。だが、それも初期に於いてだけであって、彼等も徐々に親しむ様になり、Junta はイスパニアの教育の振興に非常な力となった。廿一名の終身名誉会員並びに学問の各分野を代表する人物により構成され、更にその特徴の一つは、その構成メンバーが、思想的に絶対主義者から共和主義者、無神論者まで含んでいたことであった。初代会長は Ramón y Cajal (組織学教授でノーベル賞受賞者) だった。彼自身自由思想家で、政治に参与するを好

まず、研究に専念し、更に Junta のために非常な尽力を為した。Junta は イスパニア国民に海外留学の道を開き、能力のある者なら、年令、学歴を問わず、此の榮に浴することが出来た。これが一大刺戟となって、教師、大学卒業生などは自費で海外留学する者が増え、その数も1910年頃で、既に二千人に達していた。Junta は、知識の持帰りそのものよりも、外国での学問研究の方法を習得して来る様要望した。海外留学生の多くは医学と法律学の専攻者だった。留学を終えた青年たちは祖国に帰り、教育道にはげみ、学問の振興に尽し、或は又、民間サービス、自営工業、銀行業、実業、その他生活の各職域に於いて指導的地位を保った。国内に於ける改革の最も著しかったのは医学、物理学、化学、数学、哲学、生物学などで、その水準も海外のそれと同程度にまで向上した。

他方国状の相違から、必らずしも所期の目標に達しなかった学科があった。それは法律、経済学、政治学などであった。従って Junta はこれまでの専門研究事項を決めるのを止めて、候補者の自由な意志により、これを研究せしめる方法をとった。又 Junta は国内に 研究センターを設け、少数の有能の士に科学研究の場とチャンスを与えること、そして海外で学んだ学者の知識を、こゝで同内の諸制度に同化せしめる事、又全般的に留学生の知的レベルを上げること、そして研究の成果は、これを公けにする事、更に又将来の大学教授を養成することに重点を置いた。その結果、多くの研究所が設けられ、学問の各部門に於ける研究成果が、夫々の専門雑誌に掲載される様になった。Junta は又、1918年、政府の委託により Instituto Escuela なる学校も新設した。こゝには十七才以下の少年が学び、いわば中学教師の実験学校の様な性質をもっていた。こゝでは新しい方法が採用され、教師は一日中授業をする必要がなく、研究の時間が与えられた。更に副業を行う事を禁じ、徹底した学究組織となっていた。成績の良好な者は海外留学が許された。此の様にして、次第に活潑となった Instituto Escuela は一時、約千五百人の生徒を擁する程だったが、1930年に至って、新しい教育令により、教師の定年制がなくなり、従って、人事上の新陳代謝が少なく、折角の理想も、教師の熱の問題で、ようやく斜陽を浴びるに至った。

偲、愈々近代の教育になったが、全般的に云えることは、これまでに種々の試みが為され、教育の改善は時代を追って進められては来たが、その歩みは極めて遅々たるもので、大学にしても、依然、十九世紀のまゝであった。只、二三の講座が増え、更に Alfoso 十三世の肝入りで、Madrid に大学町が出来た位が主な出来事だった。これとても、多額の費用で建物は出来たが、人的資源の開発には、その何百分の一しか割り当てられなかった事は、非常な問題だった。更に高等師範学校が新しく設けられたことも述べられねばならないであろう。かくて、こうした外面的事象については、幾分なりとも動きが見えたが、その思想的、理論的内容については、実際のところ、Giner 或いは Cossío のそれ以来、何ら目新らしいものはない。この点でも、彼等の真価

が伺える訳である。実際、教育と云う事業は、他の学問と異なり、明確な結果或いは結論を出すことは不可能であり、而も、各教育者の事業は、専ら人間対人間の関係であるが故に、書物を多く出版した者、必らずしも、良い教育者とは云えぬ如く、その業績が、輝かしいものであるにもかゝらず、必らずしも著書が多いとば云えない。それ故に、教育者の研究には殊更、困難さが伴う訳である。その成果は教え子の次代での活躍ぶりに、これを見なければならない。

教育の事業は多難である。而もイスパニアの如き、幾多の思想的、宗教的、政治的問題を有する国に於ては、尚更の事であろう。我々は、長いイスパニアの歴史を通じて、如何に彼等教育者が、国家の文化向上発展のために不惜身命の努力を捧げて来たかを目のあたりに見て、その偉大さとその困難さを知るのである。(終)

#### 主 な 参 考 図 書

- Castillejo, José: Wars of Ideas in Spain, London, 1937.  
Fernando de los Ríos: El pensamiento vivo de Giner, Ed. Losada, Bs. As., 1949.  
Menéndez Pidal, Ramón: Historia de España, Espasa Calpe, Madrid 1947.  
Santullano, Luis A.; El pensamiento vivo de Cossío, Ed. Losada, Bs. As., 1946.  
Trend, J. B.: The Origins of Modern Spain, Cambridge Press, 1934.  
Idem: The Civilization of Spain, Oxford Univ. Press, 1952.